Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

P97

幼児と親における「男色」「女色」の選択

秦野悦子
(川村学園女子大学)

問題

「男」「女」という属性は、生物学的な差を根拠としているが、それだけでなく文化・歴史的環境を背景にして、社会化や教育により学習されていくものであると考えられる。文化・社会的に規定された性、すなわちジェンダーの認識形成にあたっては意識するか否かに関わらず、親に内在するジェンダーについての心理的枠組みが現実の養育行動に影響をあたえているものとみなされる(Rubin, 1974)。

われわれが対象物をとらえるときに、色は対象物にまとわりついて、それに対する感情や印象が同時に生まれてくるものである。また色は、抽象的な概念や感情も表現しやすいものである。男の子には黒いランドセル、女の子には赤いランドセルというように、衣類や日常用品にいたる子ども達の周囲は性による色の区別にあふれている。子ども達は知らず知らずのうちに、「男色」「女色」の 固定観念を学習し、性による枠にとらわれるのであろう。

筆者の研究室では、高橋(1996, 未発表)が、小学生 、小学生を持つ母親、大学生、大学生を持つ母親を対象に、ノートやかばんなどの日常用品に対して、男の子にふさわしい色、女の子にふさわしい色の調査を行った。その結果、小学生よりも親、親よりも大学生の方が 、「男色」「女色」という概念にとらわれた色選択をしていることが明らかになった。では対象年齢を幼児期にした時に、幼児とその親は日常用品についてどのような色選択をするだろうか。

本研究では、幼児と幼児期の子どもを持つ親を対象に、高橋の方法に準じて同様の面接調査を実施し、幼児期の子どもの色選択の様相を明らかにすることを目的とする。

方法

対象者:

幼児は年中児、年長児99名(男児56名、女児43名)
その母親70名(男児の親38名、女児の親32名)。

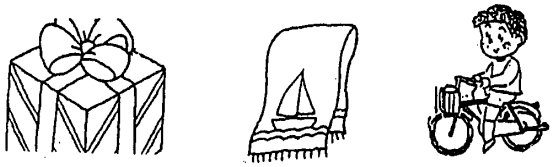
調査期間:

1997年6月～9月

材料:

色見本14色(赤, オレンジ, 黄色, 緑, 青, 紫, ピンク, クリーム色, 黄緑, 水色, 薄紫)。

日常用品25項目とそのイラストカード(通園かばん, 自転車, くつ, パジャマ, ふでばこ, リュックサック, ノート, マフラー, キャンディ, 帽子, 箸, タオル, へやのカーテン, 枕, 風船, ながぐつ, さいふ, Tシャツ, 歯ブラシ, マグカップ, プレゼントを包むリボン, 布団, なわとび, てぶくろ, クレヨン), 記録用紙



手続き:

親には調査用紙を配付し、その後回収した。「以下に示すもの(日常品25項目)に男の子、女の子にどのような色を選びますか。色見本の中から選んで下さい。」幼児には イラストカードと色カードを提示してひとりづつ面接 調査を行なった。「この絵のようなものにあなたはどの色を選びますか。この色(色見本)の中から選んで下さい。」

結果

(1)「男色」「女色」の概念

男児(56名)、男児の親(38名)、女児の親(32名)が日常用品25項目に対して男の子用に選んだ色の数を加算し、14色の選択順位をつけた(表1)。その結果、高頻度のものをM((男色)、中頻度のものをMD(中間色), 低頻度のものをUM(非男色)とした。

M : あお, みずいろ, きいろ, みどり,
MD: しろ, あか, きみどり, くろ, むらさき,
UM: 薄むらさき, オレンジ, クリーム, ベージュ, ピンク

女児(43名)、女児の親(38名)、女児の親(32名)が日常用品25項目に対して女の子用に選んだ色の数を加算し 、14色の選択順位をつけた(表2)。その結果、高頻度のものをF(女色)、中頻度のものをMD(中間色)、低頻度のものをUF(非女色)とした。

F : ピンク, あか, きいろ, しろ,
MD: オレンジ, ベージュ, クリーム, きみどり, あお,
UF: みずいろ, みどり, うすむらさき, むらさき, くろ,

NII-Electronic Library Service

表1 男児の嗜好色 男児の親が選んだ色 女児の親が選んだ色

順位	色	数	色	数	色	数
1	あお	201	あお	229	あお	202
2	あか	166	みずいろ	156	みずいろ	139
3	くろ	123	きいろ	132	みどり	109
4	きいろ	107	みどり	92	きいろ	93
5	みずいろ	103	きみどり	72	しろ	68
6	みどり	102	しろ	72	きみどり	60
6	しろ	102	うすむらさき	39	あか	34
8	オレンジ	90	くろ	38	むらさき	27
9	むらさき	89	あか	31	クリーム色	22
10	ピンク	71	クリーム色	30	くろ	16
10	きみどり	71	ベージュ	26	うすむらさき	13
12	ベージュ	68	むらさき	22	オレンジ	8
13	うすむらさき	56	オレンジ	7	ベージュ	8
14	クリーム色	51	ピンク	4	ピンク	1

表2 女児の嗜好色 男児の親が選んだ色 女児の親が選んだ色

順位	色	数	色	数	色	数
1	ピンク	153	ピンク	342	ピンク	266
2	あか	142	あか	206	あか	218
3	きいろ	96	きいろ	97	きいろ	72
4	しろ	91	しろ	75	しろ	69
5	あお	88	オレンジ	63	オレンジ	37
6	オレンジ	74	ベージュ	57	クリーム色	30
7	きみどり	64	クリーム色	44	ベージュ	24
8	みずいろ	63	きみどり	23	きみどり	20
9	みどり	57	みずいろ	13	みどり	19
10	うすむらさき	54	うすむらさき	12	みずいろ	16
11	むらさき	52	あお	7	むらさき	14
12	クリーム色	50	みどり	6	あお	8
13	ベージュ	47	むらさき	3	うすむらさき	7
14	くろ	44	くろ	2	くろ	0

(2)幼児と親における「男色」「女色」の選択

男の子に対するM,MD,UMの3カテゴリーに対する男児、男児の親、女児の親の選択数は表3の通りであり、各反応数の偏りは有意($\chi^2(4)=385.44, p<.01$)だった。残差分析の結果、男児は自分の日常用品を選ぶ際に、M,MD,UMという色カテゴリーのうちMD(中間色)、UM(非男色)を有意に多く選んだ。一方、男児の親、女児の親ともにM(男色)を有意に多く選んだ(図1)。

表3. 男の子用品に対する色カテゴリー選択

()内は%表示

カテゴリー	男児	親(男)	親(女)	合計
M	597	609	543	1402
	(42.64)	(64.11)	(67.88)	
MD	486	252	205	1002
	(34.71)	(26.53)	(25.63)	
UM	317	89	52	746
	(22.64)	(9.37)	(6.50)	
合計	1400	950	800	3150

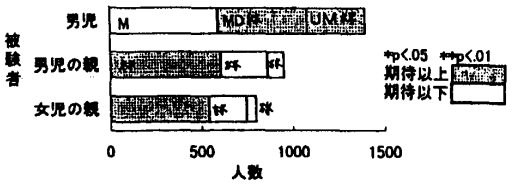


図1 男の子用品色カテゴリー選択残差分析

女の子に対するF,FD,UFの3カテゴリーについての女児、男児の親、女児の親の選択数は表4の通りであり各反応数の偏りは有意($\chi^2(4)=348.02, p<.01$)だった。残差分析の結果、女児は自分の日常用品を選ぶ際に、F,FD,UF,という色カテゴリーのうちFD(中間色)とUF非女色)を有意に多く選んだ。一方、男児の親、女児の親ともにF(女色)を有意に多く選択した。

表4. 女の子用品に対する色カテゴリー選択

()内は%表示

カテゴリー	女の子	親(男)	親(女)	合計
F	482	720	625	1827
	(44.84)	(75.79)	(78.13)	
MD	346	194	119	659
	(32.19)	(20.42)	(14.88)	
UF	247	36	56	339
	(22.98)	(3.79)	(7.00)	
合計	1075	950	800	2825

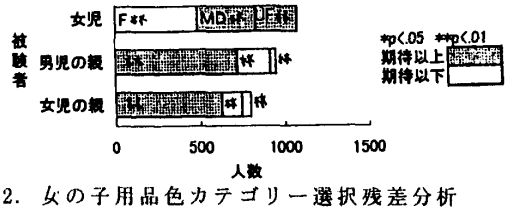


図2. 女の子用品色カテゴリー選択残差分析

考察

(1)男色

男色として、あお、みずいろ、きいろ、みどりが選択された。高橋(1996)の小学生調査ではあお、みずいろ、くろが選ばれ一部に類似選択がみられた。男児の親、女児の親ともにこの男色に対して強い選択を示しており、固定的な男色イメージを持っていることが示唆された。男児は男色、非男色にとらわれない中間色を好んで選択した。特にこの中で、くろとあかはは男児の親、女児の親よりも多く選択された。親と違って男色にとらわれない色選択がみられた。

(2)女色

女色としてピンク、あか、きいろ、しろが選択され高橋(1996)の小学生調査結果と重なった。男児の親、女児の親ともにこの男色に対して強い選択を示しており、固定的な女色イメージを強くもっていることが示唆された。女児は非女色、中間色を好んで選択した。

結論として、親は男児に対しても、女児に対しても日常的な身の回りの衣服や持物に対して固定的な色選択を行ない、色彩選択に関するジェンダー意識が養育環境として固定されていた。幼児の固定観念にとらわれない色選択が対照的であった。親の色彩選択とあわせて現実の社会の中で提供されている男の子用品、女の子用品の色選択の幅も検討が必要となろう。

NII-Electronic Library Service